

閣の總辭職となつた事は猶記憶に新なるところであるが、當時仲小路農相は米の取引停止とか、小口落としての禁止とか、暴利取締令の發令實施とか、次ぎ／＼にやる事爲す事次第に逆効果にならぬまでも豫期の成果を見るに至ら無かつたが、岡局長は常に理論から實際からかなり農相に異見も述べ反省を求めた。しかし仲小路農相は——僕も長らく逓信次官として上司に仰いだ。岡も我もよく叱られたがよく愛しよく引き立ててくれた先輩であつた——例の強氣でヒタ押しにやらうとする。例の暴利取締令も閣議で話題に出た洋行土産の翻譯であり、彼氏もかなり之には反對したさうであるが、農相の司法官時代から評判の強引に押し抜いたので、彼氏も商工局長であつた以上責を負うて寺内内閣の辭職と共に一介の浪人となつたのである。この邊の事情は同窓でありその後任となつた岡本英太郎君から、當時の述懐談を聞いておいてほしいものである。

五、四月會の話

こゝで一寸話が横道には入るが、いつの事であつたかとにかく學校を巢立ちしてまだ間の無い頃である。とにかく四月の事であつた。なにかクラス會でもあつたか寄り合があつ

た。その席上に顔を合はしてゐた連中のうちから、御互に縁ありて同窓となり世の中へかけ出したが、朝に野にこれから先きの運命はどうなるか分らない。こつちがしがみ附いてゐても突き放される事もあらう、又先方が引止めても當方から引き下がらねば男が立たぬといふ事もあらう。難病にかゝつてみじめな生活を逐はねばならぬ事もあらう。御互に今のうちから月五圓づつ贖金してさうした羽目になつた時の仲間を幾分とも手助けする事にしようぢやないか、そのうち五圓が十圓にも百圓にもなりうる時はあるだらうぢやないかといふので、よしそれもよからうと名も四月會となづけ、即座に満場一致賛成し實行しはじめたのが

岩田宙造、岡實、小橋一太、坂野鐵次郎、下村宏、松浦鎮次郎

の六名で、岩田宙造が胴元となり、會計兼利殖掛となつて居たが、當時懐中寒しい中から一同チビ／＼と掛金をする、胴元からの督促にも相當骨を折らしたものでらしいが、これがいつまでつゞいた事であらうか、もし今までつゞけてゐたなら、かなり莫大なる資産となるのだが、そのうち胴元は辯護士界の大物となる、小橋は政黨の幹部となるといふやうに、いづれも健康であるばかりで無く、胴元の外の五名は然るべく健康で官海も游泳し、もは

や職を去つてもすぐ食ひはぐれる懸念もなくなる。そんなケチ／＼した掛金などは不用である贅物であるといふので、いつのまもなく中絶される、胴元ではたゞその受け入れた金を利殖する、時たま／＼會合した節に胴元から報告がある、一同はウンさうかと鼻の先で聞き流す事ほど左様に、金額も知れたものであるし、またそれにこだはらないほど我等も有福になつたのであつた。

六、巴里會議、勞働會議、國際聯盟

四月會の連中が岡が浪人となつたどうしたものであらうといふので寄り合つたが、たま／＼の巴りの媾和會議がはじまる、こゝに經濟上の相談相手になる人をと人材を物色してゐる。岡君は適任であると推舉する。たしか同窓山川端夫君なども口を利いたかと思ふが、彼は深井英五君と共に隨員として巴里に出かける事になつた。この時の事を山川君は次の如く語つてゐる。

この媾和會議で、もつとも岡さんの働かれたのは勞働條約の問題で、當時戰爭中勞働者が非常の功績を擧げた。だからこの勞働者の社會的地位を改善しなければならぬ

といふ問題が俄に起り、政治家も理論に押されてそれでは勞働條約を作らうといふことになつたのである。岡さんはこの専門委員に落合謙太郎氏とともになられて英國流の勞資の觀念から脱却し、日本の特殊地位を各國に認めさせることに成功したのであつた。この功績は没することの出来ないものである。その關係で第一回の勞働會議には政府代表として出席されたが、終始對立し續けたわが國の勞資の代表間に挟まつて、非常な困難な立場に立ちながら、よくその難局を處理されたのは岡さんであつたればこそと思はれるのである。

いづれ精しい事は又別に當時親しく關係した諸君の中から筆にされる事と思ふが、こゝに一寸挿話としておきたい事は、當時の勞働會議における彼氏の代表問題にからんだ伊東巳代治伯の手記である。伊東伯がいつも大事記を記録にとゞめておく事は有名な話であるが、その手記中にこの國際勞働會議に鎌田榮吉が首席代表、岡實が次席代表である事の不可にして岡を首席とすべき事を力説してある事は、全然伊東伯を知らざる岡實としては未見の知友を得てゐたわけで、それが現に東京帝大法科教授なる君の第二世義武君の文獻涉獵の中から發見されたといふ事も奇しくも又美しい因縁談である。

彼は次でジュネーブの國際聯盟に經濟封鎖に關する帝國を代表して出張した。現狀維持の建前である聯盟創設當時に、海外に延びんとする日本の立場としては彼はかなり苦闘をつづけたものであつた。此間僕は又臺灣の職からはなれる事になる。今度は小橋内務次官の官邸で同友の人々から京都府知事へとすゝめられた事であつたが、もう役人といふ職に飽き／＼した僕は一介の浪人になる。次で朝日新聞社に入社して歐米に外遊する。大正の十一年の一月である、巴里の客旅ホテル・カムベルで彼と我と、語れど語れど語りつくせぬ數日を送つたのも、今更に忘れぬ思ひ出であつた。

七、毎日の岡と朝日の下村

彼と我とは相前後して歸朝する、私の朝日に相對して彼は毎日に入社する、それから又通信農商の當時よりも、同じ大阪に同じ日本の二大新聞社の一員として公私の交情さらに深く且つ密なるものとなり、いはゞ商賣敵の二大新聞對立の中に、互に赤心をおいて仕事の上にも何等の疑惑を持たず、互に信頼して何等の間隙も生ぜず、相信し相許し、こゝに又十有餘年の春秋を経た事は、只々感激あるのみであつた。

彼と我と二大新聞社には別に前々から何等の緣故があつたわけでも無い、別に株主でもない寄書家でもない、兩社の社長も幹部も皆未知の間柄ともいつてよい、さうした中へ役人から風變りな新聞社へ相ならんで入社した、それがどれだけ新聞社にお役に立つたのか之れが適任であつたのかどうなのか、そんな事は問題では無い、とにかく、まるで晶のちがつた官界から、極端から極端へ新聞人としてまで相ならんで立つ。それから彼は彼と我との經歷から又兩社代表の意味から、くさ／＼の委員會に名を列し席をならべた事も數知れずである。一體どこまで深い深い宿世の因縁やら不思議といふも愚かなりである。

八、盟友岡實兄逝く

趣味としては彼は釣や謡曲に、我は撞球や圍碁に、後ち共にゴルフを遊んだが、そのうち健康は彼のゴルフを許さず、釣もいつしか怠りがちになり、専ら謡曲の道に楽しんでゐた。交詢社の謡曲の仲間には大口喜六翁がある、物價委員會の席上で翁の曰く、私は謡曲の友を失つた、いや謡曲では無い、折々大口さん一寸といふのでよく國事を談じたものでしたが残念な事をしましたといふのであつた。病床中新聞やラヂオから縁が切れても、令息か

らニュースを聞かねば承知しなかつた。故人には病床に寝つく少し前に妻とたづねて話し合つた時も、例により例の如く時局につきかなり話しが長くなつたものである。何んとしても此時局の解決するまで生き長らへておきたかつた。

今少し早く新聞社の方を辭職したら、相當健康も維持されてゐたと思ふ。いろ／＼と僕らのやうな雜業で相携へて縁の下の方持ちも出来よう、彼も舌もあり筆もある。さらに彼はなにかとまとまつた作品も公けにした事であらう。彼にせめて今十年の健康を以てすればその信念、その材幹、その語學の力は、少くとも益々複雑怪奇を極むる國際關係において相當御奉公ができた事と信ずる。正しく楷書で堅實な足取りを印して六十七歳をむかへた彼は、若い時の深酒が累をなし、とう／＼より弱體であつた僕を残していつた、いや實はもう四五年前から残していつたといつてもよい。彼と我は折々は語り合つた「御互は同じ時に此世をおさらばするわけにもいかない、いづれが先になつても残された者はさびしい」そしていつも彼は詞をつづけた「どうもお前は活動しすぎる無理すぎる、からだを虐使しすぎる、今少し休息せよ、靜養せよ」さういはれて見ると、事實彼の亡くなつた日は朝彼の邸を弔問してから次で某將軍との面會、それから物價委員會、それから私的の二

つの委員會、さらに二つの座談會と二つの講演、しかもその一つは横濱であつた、東横電車で家門を通りすぎ、又目黒に彼氏の邸の通夜にかけつけた。

もちろん此日のやうに一日ぶつ通して氣忙しない事は例外であるが、これからは生前の彼の詞もあり、もうあまり無理はしまいたいといふ氣持ちで、彼の寫眞の前で僕は彼の言を追憶した。御互に健康だといつてゐた中から、この夏小橋一太君、これもとても頑健であつたがとても長命であるべきが酒のために、年順とはいへ最初に四月會の中から亡くなつた、そして今日はその五十日祭になる、今又君を失うていよ／＼これから寥しくなる。七月臥床してから彼は今までない微熱がある、何よりも食慾が進まない、同窓である稻田國手の言によりても、何んもなく不幸な豫感に襲はれてゐた。それから滿鮮の旅の宿にも歸つてからも、いよ／＼彼が亡くなるまで、いつも何か曇り日に重荷を背負つてゐるやうで、電話一つかゝつてきてもハツとする、岡の家からかと頭へひゞく。今やその不幸なる豫感がとう／＼實現され、今猶夢のやうな感じがする。今日は原稿の締切りといふのでペンをはしらせて見たが一向に記事がまとまらない、だら／＼と思ひ浮ぶまゝ書きつけて、此重大時局に際し、君の長逝を惜しみ謹で盟友岡實兄の冥福を祈る。

(追記) 故人と僕の思ひ出はそれからそれへと湧いてくるが、中にも東京市政調査會と故人の關係は逸する事ができ無い。同會も池田宏、松本幹一郎、岡實と引つゞき物故者を出した。同會は後藤新平伯によりて生れたもので、こゝには同會と故人又僕といふつながりも、總選舉と倫理化運動の前後を通じ、くさくさの思ひ出を残してゐるといふだけに止めておく。

(再記) 僕は書齋内に友人の靈位をまつてある。大東亞戰による輝かしい戦果のあとに、岩永、岡、津村三君それから次で亡くなつた湯淺倉平君の靈位の前に、時局の動きを告げて、諸氏の冥福をいのつたのであつた。

津村秀松追悼歌

面長おもながな紀州なまりの生ぬなまるい聲まで似てゐた素雨と海南

彼神田に我本郷に若き時は血を見んとせし事もありしか

外遊まきの君をおくると送別の宴つゞけたり三日三夜

どこまでもはなれがたかりベルギーの下宿住居に朝も晝も晩も

我爲に影にひなたに良きことも苦き詞も言ひくれし彼

彼と我と筆に舌に面ざしに兄弟にてありし双兒にてありし

津村素雨と僕

上、學友津村秀松

紀元二千六百年の元旦を、筆者海南は今海南島の南端三亞に迎へてゐる。

暮の二十九日素雨津村秀松病篤しといふ電報を臺北に手にし、心落ちるす夢結ばれず、あくる三十日遂に長逝せる入電を耳にしながら、朝臺北を發し、夕べ海南島まで飛行をつづけ、今三亞に着いたのである。

昨秋の滿洲の旅窓に、岩永裕吉君の凶電を耳にし、歸來岡實君の逝けるあり、今又南國の旅に素雨逝けりと聞く、傷心又焦心夢に夢見る心地である。

門松は冥途の旅の一里塚といふ。海南島には松が無い。木麻黄の松に似たるを竹に添へて、海南島の軍衙の門に、街頭の店先に、飾られてある。海南は大日本帝國紀元二千六百年の新年を海南島にむかへつゝ、椰子しげる南國の旅の窓に胸にうかぶまゝ、元旦の夜筆

始めに故人をしのびて此一篇を筆にする。

津村素雨は紀州日高郡御坊の産である。おなじみの道成寺は御坊町の郊外にある。その御坊に程遠からぬ名田村が僕の九人兄弟の祖母ならびに母の里であるから、僕には數知れぬ名も知らぬ従兄弟や再従兄弟がある。素雨と海南とは何等親になるのかは知らない。かなり遠い事は遠いが、縁つゞきであるといふ事である。

彼れが一つ橋の高商に遊んでゐる頃は、僕は本郷の高等中學、ついで大學に在學してゐた。當時和歌山學生會を中心として、本郷の大學と一中と神田の一橋高商との間に紀州の學生が相對立し、伊勢の荒神山といふやうに血の雨をふらした大ゲサなものではないが、とにかく出入りがあつた。その時の立役者が本郷に海南と西風重遠あり、神田に素雨と窪田四郎老などがあつた。俗に玉川樓事件及び金清樓事件といはれてゐるが、いづれも兩人共にかつて筆にせるものがあるからこゝには省略する。

もともと個人々々の間のにくしみから出たわけで無いから、その後さうしたいさくさは水に流され、明治三十二二年の交まだ學校から巢立ちしたばかりの時、東京商業學校に御互に先生ともなれば、悪友としても肝膽相照らした。彼がいよいよ獨逸へ留學といふ時に

は、送別と號して三日三晩照らし合はしたから相當なものであつた。

その素雨がドイツで一と通り染め上げ、日露の風雲も次第に急をつぐるの時、さらに仕上げにベルギーに立ちより、フランス語をカヂリつゝあるとき、僕は同國へ留學を命ぜられて、はからずも萬里の異郷に落ち合ひ、ブルッセル市リュード・ラ・リミット四番地のパンシオンに寢食を共にする事となつたから、かなり因縁は深くつながつてゐる。

當時武府在住のチャボネはいつも一つになつてカフェーセジノで球をつく。あとは下町をブンメル、左なくば加藤恒忠公使の邸へのり込み屢々曉にいたる。當時の交友をかへりみるに、公使館の加藤恒忠、龜山松二郎、松村貞雄、民間の久野安雄、柴崎雪次郎の諸氏いづれも故人となり、近く旭ガラスの山田三次郎君逝き、今又津村秀松君の長逝を聞く事となつた。もはや彫刻の大家になつてゐる善友武石弘三郎君を残すあるのみ。さりとは心さびしき限りである。

歸朝した素雨は神戸高商の教授となり、君の國民經濟原論は洛陽の紙價を高からしめた。當時の神戸高商は天下の俊才をあつめ、津村教授の名は神戸高商の名を重からしめたのである。

僕は貯金局に陣取つて傍ら君と同じ學界の晶に足を入れて居たから、交友ますます深く、僕が簡易生命保險事業の創設に手をつけそめると、君は社會政策學會などで助勢をしてくれたのみならず、當時僕があつて來た歐米朝野の簡易保險に關する資料の翻譯は、大部君の門に集まりし俊才によりて仕送げられたのである。

外務省の加藤外松、松島鹿夫、三宅哲一郎、宇治川水電の小池卯一郎、東京朝日新聞の石井光次郎、故原田萬治の諸君は、當時貯金局の一員となつて翻譯を受持つてくれたのであり、それはいづれも君を介しての事であり、又それが石井君と僕との臺灣入りとなり、次で朝日入りとなり、さらに現在の東西朝日に數多い神戸高商出身の人材の集まりとなつて來たのである。

僕は一時しばらく神戸商大の講壇に立つた事もあるが、僕の神戸高商とかなり縁のふかくなつてゐるのは、一に津村素雨と親しく友として相よれるが爲に外ならないのである。彼れ博士となり我又之に次ぎ、我官界を去りて朝日新聞社に入るや、彼又官界を去りて久原商事に、後大阪鐵工所を主宰する事となつた。

此間の故人については、君の門下生であり君の女房役となつた飯島幡司君が尤もよく知

つてゐるから、いづれは飯島君の筆をまつ事であらう。

下、盟友津村秀松

その後君實業界を去りて純然たる浪人となる。我又朝日を退社して一介の野人となる。悠々自適しつゝある彼は、いつも僕を促らへて「お前のやうに五體を虐使してはいけない、もう年が年だ少しはラクにやれ、休養が肝要である」と切言してくれた。僕は又浪人暇なして今日が一年中一番忙しい生活を遂つてゐるのである。それだけに「お前のやうにプシヤウでは困る、今少し活動してはどうであらう。あまり休養しすぎてゐる」といつたものである。

もちろん素雨は僕にくらべてプシヤウといふまで、ツムラ式のオトノサマ式又レデキース式のゴルフは醫戒により取りやめたが、菊の手入れにかなり忙しいやうであり、常に時局を憂へて危言を筆にした事は、周知の事實であると思ふ。

殊に君が晩年筆にした隨筆は君の學識と俳人素雨を以て知られし文才と相まちて堂に入るものがある。君の近著隨筆集を一見し、その文藻と筆致に魅せられる人が少くはない

はずである。

俳人素雨としての彼の作品をいくばくに評價してよいのか、僕にはよく分らない。恐らく僕の短歌と相似たる程度のものに過ぎないのかも知れない。しかし彼れの隨筆はこれから益々油が乗つてくるはずである。筆を染めてよりあまりにも歳月に恵まれなかつた事は遺憾といはねばならない。さらに君の政治財政經濟に關する意見は、經世の筆として重きを爲せるもので、國家益々多事なるの秋、再び君の情理つくせる椽大の筆を見る能はざるに至りし事は、さらに遺憾の極である。

君と僕とは年は一歳ちがひであり、上來筆にせる如き關係で、學生時代から留學時代から、學界及び業界の分野に於て、あまりにも長くしかも相近く、相似て相親しきものがあった。

僕とその徑路に於て相似たるものが實に岡實、津村秀松の二兄であり、今相ついで長逝したのである。僕としては誠にたとへ難ないショックである、打撃である。僕は今我心にむち打つてゐる。まだ僕は存外頑健である。臺灣で連日連夜自動車、汽車、見學、宴會、放送、講演をつゞける事旬日にわたりて少しの疲勞をも見ない。少閑を盗んではゴルフもゾ

レイしてゐる。海南島に入りては連日デコボコ道を百キロ前後ドライブしてゐる。今の僕の気分は此上は自重自愛しつゝ兄等の分をもあはせて、限りあれどいつとは分かぬ玉の緒のたゞ絶ゆるまで、微力のかぎり活動をつゞけてゆく。之れがあとに残されし僕の、亡友へのせめてもの務めであると思ふ。

素雨かつて我に曰く「御互にあまり親しいから却つて御互の揮毫ものが手には入つて無い、今のうち御互に我は俳句を君は短歌を筆にし、表装せる上交換して置かうではないか」と、僕立ちどころに共鳴して然諾、互に筆にし表装し交換したものである。

之れから僕は南支中支を経てかへる。そのかへり路には君の墓前に弔ひ、さてかへりては君の書幅をかゝげ、さらにさらに思ひ出を新にしたいと思ふ。

君についてのくさぐさの追憶もあるが果てしが無い。海南島三亞の客旅に、この邊で筆を止め、更に他日を期する事にする。

淡水にて素雨病あつしといふ報を耳にす

球打てど心こゝにあらず外れ球のあと逐ふ前に友の姿うかぶも

千里の外に遠くはなれて旅の宿に友をしのべば夢結ばれず

あまりにもはかなかりける津村素雨のうせしといふもそれはまことか

我逝きしあと弔はん我友のあわたゞしくも先たつとははや

(一五、一一。海南島)

津村素雨の隨筆集

社會小景(双雅房發行)

道成寺(中央公論社發行)

春秋剗記(小山書店發行)

俳句集花野ゆく(双雅房發行)

津村素雨逝ける日

前文は一月元旦の夜海南島三亞の旅窓にベンをはしらせたのであつたが、一月五日臺北に飛びかへつて見ると、故人の愛弟子の一人である東京朝日の睡蓮石井光次郎君から次の如き航空便がついてゐた。こゝに追てがきとして轉録する。

津村先生の事あまりにも突然で驚きました。二十七日朝高熱で病名不明だが入院させるから秀夫君に歸神せよとのたよりを見、翌日見舞の電報を出したら、その夜危篤の報に接し、翌二十九日見舞に行くつもりで社に出たら死亡の通知を受けました。原因不明の敗血症でどうする暇もなかつたさうです。

その夜西下三十一日に葬儀。生きてるやうな「先生」といへばふり返りさうな死顔でした。もとの生徒たちばかりに圍まれたやうな情緒の深い葬儀でした。

侍立しながら先生の遺愛の花の残れるを見、先生の得意だつた俳句を二三つくりました。

椿の花たわわなるに君今や亡し
花輪の菊その白菊の佗しきよ
もぎ残る柿の實もあり師走空
蠟梅が風になげいてをり候

風の強い空は晴れたれど佗しい日の告別式でした。

以上は臺北の旅の宿で入手した石井君よりの來信である。一月八日臺北をあとに上海に入り、十七日朝上海を飛び立ち夕刻前東都羽田に安着した。

朝風莊に入り、早速押入れより、故人からおくられてあつた二つの軸をとり出した。

一つは

肱 つく や 机 つ め た し 春 の 雨

といふのであり、一つは次の三句をならべしるしてある。

みちのくの吟

新涼や湖上を渡る鳥の數
稻の風鳥海山をふきゐたり
空ら鐵砲鳴子代りと響きけり

とある。昭和十一年初夏とするしてあるが、前田米藏君等と行を共にした十和田行の旅の作品である。床の間にかゝげて香をたき、翌十八日朝澁谷南平臺に秀夫君の邸をたづねた。遺影を飾れる床の間には故人の筆になれる

入雲 不見雲 出雲 初識雲

といふ軸がかゝげられてある。中支の旅をつゞけて朝夕支那事變といふ大きな謎をとくべく數知らぬ内外の要人と話を交はして見たが、結局誰人にも分らない。廬山の眞面目その身山中に在るに由るといふ感をふかめるばかりである、故人の筆にせる軸の前に、又その感を新にしつゝ、今更ながら故人健在ならばといふ追慕の念にふけりつゝ。

(十五年一月十九日、追記)

跋にかへて

「二期一會」と題したる由縁により、相馬御風大人と普信をとりかはした。こゝにその一文をうつして跋にかへ、重ねて厚く感謝の意をいたす。

×

×

×

(前略)新著下村海南選集御惠送に與りよろこばしくありがたく、くりかへしく拜見いたし、御芳情深く感謝申上げ、且つは文章に歌になみくならぬ心の糧を恵みに與りました次第であります。なほ近く「二期一會」を題とされました歌集刊行のよし拜承ひどく胸を打たれましたこと御座います。

死の覺悟すでにかためて一筋の道をし進む人のともしき

生き死にの境を超えてひた進む人の姿のたふとくもあるか

「二期一會」の心もて日に日に世を思ひ人と交はる人ぞゆかしき

國寶の觀世音佛の前に肩ならべ大人と坐りしも七年のむかし

七年の月日みじかしと誰かいふこの七年は事多かりき

あまりにも大きな事ありしと思へ海南先生彌大さかり

しなさかる越の海邊のふるさとに海南先生迎へし忘れず

「二期一會」とおもへばいよゝかの時のかの語らひのたふとくもあるか

「二期一會」と思へば日々のいとなみのたふときかなやその日その日も

遺書常にかきてしあれば安けしとのたまふ大人はすがくしかも

すがくしくすこややく永く生きたまひみちびきたまへ世の人々を

生くるもよし死するもよしとのたまへど生くべき限り健ややくませ

國大に興らむとする今にしていよゝたふときみいのちなるを

高山はすでにましろしこゝにして大人むかへしは五月なりしが

七年前のかのこやかさもりかへしいやすがしくを生きませと祈る

昭和十六年十一月二十七日

相馬御風

認承協文出
第311號

印檢者著

納本

一期一會 定價參圓

著者 下村海南

發行者 渡邊久吉
京都市河原町二條下ル

印刷者 堀井二郎
京都市河原町丸太町上ル

發行所 人文書院
京都市河原町二條下ル

登錄番號 一一二二五三
振替 大阪八貳壹六參番
東京貳八四五九番

配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

發行 昭和十七年六月二十日

發行 昭和十七年六月廿五日

浦和高校 藤田徳太郎著
近代歌謡の研究
新刊 五〇〇頁
價二・〇〇送〇・三三

教授が學位論文のつもりで、精魂を打込んだ書。稀覯の原色、凸版、寫眞百餘。近代歌謡は吾人の生活と連綿多き故、一般の讀者にも、好事家にも向く。

文學博士 佐佐木信綱著
勅撰集評釋
新刊 四〇〇頁
價四・五〇送〇・三三

平安朝から室町時代へまでの、いはゆる二十一代集の評釋であつて、これぞ博士が曾て東大で講ぜられたもので、博士百數十の著書中、首位のものだ。

二松學會 森本治吉著
萬葉集新見
新刊 三〇〇頁
價三・〇〇送〇・二四

本書は第一部歌解、第二部雜語註解より成り、實に著者廿年の研究集成である。その引用歌の豊富は、索引の新工夫と相持つて萬葉研究の至寶。

京都帝大元 東 光治著
萬葉動物考
新刊 五〇〇頁
價四・五〇送〇・三三

廣く同じ時代の文獻や遺物を調査し、萬葉動物とも對照して、當時の生物の生育状態を推定し、た上、その名の由來を究め、更に現代の動物分布や季節變化を考慮して判斷してゐる。

折口信夫 高崎正秀著
萬葉集叢攷
新刊 三二〇頁
價二・八〇送〇・二一

日本思想の精華萬葉集は唯だ文義的乃至は文字的解釋では解決出来るものではなから、これを民族學的に研究しつゝある學者として特異の立場にある。

浦和高校 藤田徳太郎著
日本文學の世界
新刊 四〇〇頁
價二・五〇送〇・二五

國文學とはどう云ふものであるかを説いた書で、「國文學の手引書」とも云ふことが出来る。國文學に與味を持つ人々が出来れば本書の意義がある。

浦和高校 藤田徳太郎著
國文學の歴史と鑑賞
新刊 二七〇頁
價二・〇〇送〇・二〇

日本文學の歴史を簡明に體系をたて、然も文學史で取扱ふ問題を、説いた史的現象を、更に具體的に、個々作品に就いて鑑賞してゐる。

浦和高校 藤田徳太郎著
現代の國文學
新刊 三〇〇頁
價二・五〇送〇・二四

「日本文學の世界」「國文學の歴史と鑑賞」と共に三部作をなすものである。「國文學の精神」と「國文學と教育」の二篇よりなり、國文學の現代に於ける意義を明らかにしてゐる。

國學院大學 高崎正秀著
金太郎誕生譚
新刊 三九〇頁
價二・五〇送〇・二五

書中の各篇は、何れも民族と國史、國文學の微妙な交錯に對つて新なる解釋を加へてゐる。新國學樹立の基礎、明日への國文學研究の規範である。

文學士 中島悦次著
傳説の誕生
新刊 三〇〇頁
價二・五〇送〇・二五

著者は「神話」「傳説」の研究に於て好評はラチオの趣味講義に於て他に書即し數篇を加へて十書と人々の必讀の文字。

佐佐木信綱 瀧著
萬葉名歌鑑賞
新刊 三〇〇頁
價三・五〇送〇・二五

著者廿年の努力と情進に依つて成つた、萬葉集四千五百首中の名歌を鑑賞したものだ。萬葉と云へば難澁な面白くないものとされてゐたが、本書の出現に依つて甦つて大衆化された。

東京音學 風卷景次郎著
新古今時代
新刊 六八〇頁
價四・五〇送〇・三三

「新古今集」「作家篇」「文獻篇」に三大別され、その考察吟味の哲學的であることは、風卷氏の恐るべき頭腦のよさを雄辯に物語るものである。

川田 順著
俊成・定家・西行
新刊 三〇〇頁
價四・〇〇送〇・二五

本書に收むるは、俊成・定家・家隆・西行・益嶺・良經に對する縱横の評論と名歌鑑賞と「新古今集」と萬葉集と藤原家隨論と西行傳記と歌鈔と等て幾多の新説と示唆を藏す。

太田水穂著
神々の夜明
新刊 三三〇頁
價一・八〇送〇・二〇

古事記の眞髓と云ふべき書で、古事記で明かでない所が、平易に興味深く、一般讀者層へまで展開された、昭和の夜明に偲ぶ神々の夜明を知ることが出来る。

文學博士 齋藤清衛著
日本文學
新刊 五五〇頁
價三・五〇送〇・二一

傳説の再興、古典の再吟味と日本文學の關心は急速に眞摯に叫ばれる折から、日本文學の精神を「神々」と「浪うつところ」の神美をテーマに追跡したエッセイ集である。

京大元 東 光治著
生物曆
新刊 五二〇頁
價四・〇〇送〇・二四

著者多年に亘る研究に依つて成されたもので、動物植物の四季に於ける生態を、時記によみ易に述べたもので、歌人、科學人的に數歩進めた書である。

中山太郎著
民族點描
新刊 三三〇頁
價二・〇〇送〇・二五

「神代史の構成と婚姻相」「巡り神の信仰」「復活した神々」「太陽を射落す話」「雷神としての牛」「仁聞菩薩」「將軍地蔵」「無問の館」「高野山女人堂」「造り外數篇」。

國學院大學 河崎實英著
有職故實圖譜
新刊 五〇〇頁
價五・五〇送〇・二一

古來有職に關する圖録は極めて多し、然もその多くは相當誤りが多い。本書はその誤りを是正し、足らざるを補ひ、著者三十一年の研究成果で、斯界の權威書である。圖版二五〇。

帝國博物館 關保之助述
式正の鑑
新刊 二〇〇頁
價一・二〇送〇・一四

「式正の鑑」とは形態構成等の最もよく整つた大鑑のことである。この大鑑について、純然たる素人に判る様、その起源發達、構成、各部名稱、着用法、注意等各般に互つて詳述さる。

東京帝大教授 永井澄著
道と自然
新刊 四三〇頁
價三・八〇送〇・二五

東洋哲學の源流老子は「道は自然にあり」と云ひ、又、近代哲學の大祖カントは「道は人にあり」と云つてゐる。「道と自然」は兩者を止揚したものである。

高野山大學教授 福來友吉著
三 心靈と神秘世界
價五・八〇 三〇二頁

文部大臣 橋田邦彦著
自然と人
價二・〇〇 三四〇二頁

東京帝大教授 永井 潜著
二十 人及び人の力
價一・五〇 三八〇二頁

慶大醫學部助教授 林 毅著
思想と生理
價二・〇〇 四〇〇二頁

慶大醫學部助教授 林 毅著
刺 戟
價二・〇〇 三三〇二頁

大聖釋尊が涅槃寂靜の境として前めて體驗され、更に弘法大師が秘密莊金剛會として釋明された神秘世界を、學的に説明したものが本書である。

その言々句句には、巾廣き壓力を讀者の肺腑に感ぜしめ、然もその壓力のもと道と人に對して不斷に燃え盛る齟齬たる愛と真理を見出すであらう。

偉大なる「人の力」を生活現象に即しつゝ、生命の醫學・哲學・健康と、凡ゆる方面に互つて詳敘してゐる。蓋し醫學書であり同時に哲學書である。

刺戟に次ぐ、第二の科學隨筆集である。本書が世に出るに及んで、著者の文章家としての位置は決定的なものとなつた。著者は有名にした書である。

自然科學者中の一異彩たる博士の隨筆と生理學解説とを蒐めたもので、その若々しい筆致、興味深い解説、野心ある思索は實に著者の獨壇場。

高野山大學教授 福來友吉著
生命主義の信仰
價三・二〇 四五〇二頁

九大元教授 藤澤親雄著
諸問題
價一・八〇 三〇〇二頁

倉田百三著
日本主義文化宣言
價一・五〇 三〇〇二頁

金澤醫科大學教授 古屋芳雄著
民族問題をめぐりて
價二・〇〇 三三〇二頁

早大教授 西村眞次著
民族と生活
價二・〇〇 三〇〇二頁

本邦における唯一の神秘心理學者として、吾れ人ともに許す博士が、信仰界のダーク・エーチに巨火を掲げたものが本書である。本書はよく祈りの學者としての本領を發揮してゐる。

日本學の權威者として知られてゐる著者が、著書に傾けて成した書で新世紀の人類普遍原理である。時代の要請するインテリゲンチヤの必讀書である。

新しい日本の文化に熱烈な運動をして來た著者は、今や漸く新日本文化が築かれんとする時、本書を世に送る。大いなる愛と信仰は讀者をして、倉田氏に心酔せしめるであらう。

醫學者にして、同時に筆の人である博士の生物學者、衛生學者としてのものゝ、民族問題に觸れたもので、民族問題の八釜しい折から必讀の書。

第一篇に於ては「民族と文化」に就いてのエッセイを、第二篇では博士の得意の「船舶の歴史」について的小品を、第三篇では當面の社會問題、教育問題等を蒐めた隨感・隨想。

早大教授 西村眞次著
文化と歴史
價二・〇〇 三〇〇二頁

早大教授 西村眞次著
人類と文明
價二・〇〇 二七〇二頁

慶大教授 浦本新湖著
科學と民族
價二・〇〇 三三〇二頁

文學博士 富士川游序
醫學博士 松村寛治著
科學的宗教
價二・〇〇 二五〇二頁

吉田平七郎著
科學する動物園
價一・八〇 二〇〇二頁

専門以外に、國史、國文、古代經濟、考古、人類、海運、船舶と、かやうに多くに通曉してゐる博士の本領を最もよく發揮した書。

例に依つて、その博學振りを發揮した書であるが、人類の發展を文化史的にみた諸種の論文を始め、考古學的隨筆、隨想をも盛つてゐる。

現代は科學の時代であり、同時に民族の時代である。然して、その民族の興亡は、舉つて科學にあると云つてもいい。本書は科學より日本民族を觀た日本人必讀の書である。

著者は夙に宗教に疑義を持ち、多年各宗教を研究し、それを見事解決、神祕的宗教より科學的宗教を提唱するに至つた。本書は各宗教を徹底的に検討したものである。

科學する心をもつともよく會得させるに、動物園から理想的動物研究から科學せよと呼びかける。動物の譯外讀本としても

吉田平七郎著
動物園より
價一・五〇 三〇〇二頁

陸軍航空を語る
價一・八〇 三〇〇二頁

京大教授 小南又一郎著
實例法 醫學と犯罪捜査實話
價一・八〇 三〇〇二頁

東大教授 古畑種基著
法醫學と犯罪捜査
價一・六〇 二五〇二頁

京大教授 小南又一郎著
犯罪心理講話
價一・八〇 三〇〇二頁

動物の簡單な生態やそれに纏はるゝ美麗な話を織込んだもの、美觀な寫眞十頁あり、小學生として好適。又、動物寫眞に興味を持つる人にも好參考。

陸軍航空の權威たる著者が、その著書に傾倒して出來上つたのが本書であつて、陸軍の航空に關する限り、凡てが網羅され、各國の秘密も暴露されてゐる。

最近の犯罪捜査に重大な役割を演じ、今や決定的にその成功を把握する法醫學を、興味本位にその實例百五十編を入れて述べた探偵小説より面白い書。

法醫學が犯罪捜査に必要なことは云ふ迄もないが、それは如何にしてなされてゐるかを、興味ある例話に依つて述べた書。興味ある者は指紋研究の世界的權威者である。

人は十人寄ればその顔が盡く異つてゐるやうに、その心理も凡て違ふ。この犯罪人の心理も、實例をもつて説いたのが本書で「實例法醫學」と姉妹篇をなす。

東大助教授 永田秀次郎著
 元注 國語大系 永田秀次郎著
 文推三 國民の書
 名高十
 四六判三四〇二四頁
 價一・〇〇送〇・二四頁

誰が讀んでも爲になり、然も面白く、これこそ國民皆讀の書である。と、讀書界を席捲し、一月を出でぬうちに三十版を重ねるに至つた。文字通り國民教養の書。

著者林 持田慈訓著
 禪の概説
 四六判三七〇二四頁
 價二・五〇送〇・二四頁

禪學入門の書と云ふものは可成り澤山あるが、禪商量のやうで、一般に呑み込めないものが多い。本書は誰にでも判る様、講演體をとり、禪を概説した書である。

京都帝國大學名譽 近重眞澄著
 教授・理學博士 近重眞澄著
 雪だるま
 一附、禮林世話集
 四六判三七〇二四頁
 價二・五〇送〇・二四頁

禪堂は勿論のこと、陸軍海軍の將校連から、各専門學校、そして一般にはラヂオ放送に、そして到る處で噴々の好評を博した。龍話。殊に信心銘講話は、最近天龍寺僧堂に於て講じた名講だ。

近重物安 野村瑞城著
 博士題字 野村瑞城著
 澤庵と不動智の體現
 四六判四〇〇二〇頁
 價一・六〇送〇・二〇頁

禪門の巨人澤庵は三代將軍家光の精神上の師であつた。その澤庵が柳生但馬守に與へた「不動智神妙錄」の一巻は劍の神祕に托して不動心の極意を啓示せるもの。本書はその解説書だ。

カーリントン 關 祐昌譯
 博士 著 關 祐昌譯
 現代心靈現象の研究
 四六判三六〇二五頁
 價二・五〇送〇・二五頁

米國に於ける心靈研究の權威として、世界的至寶と云はれてゐる博士が、現代に於ける心靈現象の種々相を、興味深く述べたのが本書である。

東大助教授 金田一京助著
 文學博士 金田一京助著
 學窓隨筆
 四六判三一〇二五頁
 價三・〇〇送〇・二五頁

親友であつた清熱の詩人石川啄木の大きな影響を與へた金田一博士の隨筆集。博士の隨筆ほど靜かに、然も迫力あるものはない。それは著者その人の様だ。

東大助教授 金田一京助著
 文學博士 金田一京助著
 探訪隨筆
 四六判三一〇二五頁
 價二・〇〇送〇・二五頁

熱と愛の學者、金田一博士は誰もが手をつけなかつたアイヌ語研究を完成した。その泪ぐましいエピソードの数々は、その魅力ある筆と共に萬人を魅了せずにはおかぬものだ。

早大教授 西村眞次著
 文學博士 西村眞次著
 傳統と土俗
 四六判三〇〇二四頁
 價二・〇〇送〇・二四頁

第一篇には史學的なもの、社會學的なもの、第二篇には民俗學的なもの、第三篇は人格と書格に就いて述べてゐる。全篇を通じて傳説と土俗の色濃い。

公命全權 市河彦太郎著
 特命全權 市河彦太郎著
 外交と生活
 四六判三四〇二四頁
 價二・〇〇送〇・二四頁

今日ほど外交と日常生活の關聯性が緊密であり、従つて又外交の一つ／＼が國民生活に反映することゝ曾てない。そこにわれわれの重大關心が生れねばならない。

慶大教授 宮島幹之助著
 醫學博士 宮島幹之助著
 蝸牛の角
 四六判三三〇二五頁
 價二・〇〇送〇・二五頁

歐米へ研究旅行されること十八回、曾て、聯盟の保健部創設者。謹嚴そのもの、機な學者であり同時に洗練されたゾモールを飛ばす著者の隨想隨筆集である。

終